

## 逢初川源頭部の崩壊メカニズムの推定についての訂正・おわび・追加情報

### 1. 訂正 (2021年7月14日15:00～の記者会見内容)

同日の記者会見において、「2011年1月31日までに、盛土は推定10段程度で(崩壊した)道路付近まで達していたと推定した。」旨述べた。

その根拠について

(誤) 記者会見の場で提示した「国土地理院の情報」及び複数の方から提供いただいた写真情報

(正) 複数の方から提供いただいた写真情報

### 2. おわび

塩坂邦雄氏は、7月8日、県に対し、同氏の独自の調査と解析に基づき、「逢初川の源頭部への雨水の流入は、現在、流域とされている部分だけではなく、上部にある標高の高い地域からの流入量を考慮すべきである。」旨の有力な情報をいただいた。難波は記者会見において塩坂氏の情報の重要性を適切に評価せず、塩坂氏の名誉を傷つけたことを心からお詫び申し上げます。

### 3. 追加情報

#### (1) 盛土部分の崩壊原因について

##### ① 盛土部分の崩壊の起点 (訂正ではなく再説明)

7月14日の記者会見において、以下の旨を説明した。

盛土部分の崩壊の起点(どこから崩壊が始まったのか)については、

ア. 盛土部分の最下端のパイピング現象

イ. 盛土部分最下端より僅かに下流の溪流部

のどちらかが考えられる。アが極めて有力であるが、イであることも否定できず、今後の詳細調査・解析によってもこれはなかなか特定できないのではないか。

ただし、これまでに行ってきた分析は、「二次災害発生の防止等のために、残されている盛土の崩落の可能性を推定する必要があり、そのために盛土の崩壊メカニズムを推定する」という目的である。この目的のためには、アかイかということは重要ではない。

(追加情報)

② 「盛土部の排水が悪く盛土全体に水がたまっていた(盛土内はほぼ満水状態)」という推定について

i) 7月11日に、ある研究者の方からいただいた「県の推定」に対する助言

(助言内容)

- ・「盛土下端部のパイピング現象が盛土部分の大崩落の最初の挙動」という推定は合理性がある。この際、盛土全体についてみると、そこへの上流部からの河川の流入や、河川並の地下水の流入はないと思われる。
- ・このことから、盛土の上部までが満水状態でなければ、下部が下流に流下しても盛土の最上部は流動化せず、河道の傾斜を考慮すると下流域にまで達しないで、上流域の河道内に残っているはずである。レーザ計測結果によると、崩壊した盛土は河道内にあまり残っていないと推定される。

よって、「盛土は上部まで満水状態となっており、一旦崩れると流動化しやすい状態だった。」という推定の確度はかなり高いと考えられる。

③ 2. の塩坂邦雄氏の情報及び上記助言をもとにした追加的推定

- ・「今回の大雨によって崩落した盛土の体積は約 54,000 m<sup>3</sup>であり、

その中に流入した降水は大胆な仮定のもと計算すると 16,000 m<sup>3</sup>となる。」とした。この 16,000 m<sup>3</sup>は、流域面積を 40,000 m<sup>2</sup>として計算したものである。

- ・流域面積は降水が分水嶺で分かれる範囲として計算されるが、これは表流水の動きであり、地下の水の動きを反映していない。
- ・逢初川源頭部に流入する水は、流域内の降雨量とともに、流域外のより標高の高い地域からの地下水を考慮しなければならない。これによって、逢初川源頭部には逢初川の流域内の降水のみならず、逢初川の流域外の地下浸透水が流入した可能性がある。
- ・この結果、盛土内に浸水した水量は 16,000 m<sup>3</sup>以上であった可能性がある。

#### 4. 御礼

以下のような迅速な行動と情報提供に感謝申し上げます。

- (1) (株)東日は、「災害又は事故における測量設計等業務委託に関する協定書」(静岡県交通基盤部長と一般社団法人静岡県測量設計業協会の間)に基づき、7月3日17時、悪天候の中、ドローンによる空撮を行い、直ちに解析を行い、18時30分に熱海土木事務所に情報提供いただいた。

情報公開先：ふじのくにオープンデータカタログ  
情報公開先：ふじのくにオープンデータカタログ (G空間情報センター)

また、7月6日にドローンによるレーザ計測を行い、交通基盤部に情報提供いただいた。

情報公開先：G空間情報センター

- (2) (株)ウインディーネットワークは、7月5日、6日に、ドローンによるレーザ計測を行い、交通基盤部に情報提供いただいた。

情報公開先：G空間情報センター

- (3) 静岡点群サポートチームは、国土交通省沼津河川国道事務所取

得の3次元点群データ（2009年6月27日計測）と静岡県取得の3次元点群データ（2019年12月11日計測）の比較により、同期間内に、逢初川源頭部において、5.4万m<sup>3</sup>の土量増加があること、逢初川源頭部に階段状の構造物が見られることを解明した。その結果を7月4日0時04分に難波副知事に連絡した。

- (4) 上記により、静岡県は、「逢初川源頭部に盛土が造成されており、その部分が崩落したのではないか。かつ、盛土部分の落ち残りがあるのではないか。」ということ早期に推測することができた。また、直ちに源頭部の現地踏査を行う必要があることと認識できた。
- (5) 国土交通省中部地方整備局においては、静岡県からの要請がある前に、プッシュ型で、照明車等の機材の派遣を決定した。このことが、逢初川源頭部における機材を用いた監視・通報体制の早期構築につながった。
- (6) 現在、なお、自衛隊、消防、警察、海上保安庁等による懸命な捜索活動が行われている。初動段階で、静岡県庁組織のできることは、こうした人々の活動の側面支援と被害に遭われた方々の不安等の軽減である。
- (7) 行政外からの不確定な情報が多数であることは不安等を増幅させる可能性がある。また、風評被害の可能性もある。このため、静岡県庁のできることとして、ある程度の確度があれば、積極的に情報を開示した。

## 5. オープンデータの重要性

上記のとおり静岡県が公開（オープン）にして点群データなどに行っていることから、そのデータ等を使用し、多くの方々が独自に様々な解析

を行っている。今後、静岡県は発災原因の解明・究明を行っていくが、皆様の解析結果を参考とさせていただきたく。

なお、これまでは、初動として二次災害防止あるいは関係者の不安低減、風評被害軽減のため、未確定情報も積極的に公開してきた。

今後は、原因究明・解明においては、できる限り確定情報に基づく分析が必要であることから、情報発信は確定情報を原則とする。